

老人福祉と寺院の役割

先頃、私の住んでいる市の社会教育課の婦人講座担当の方と話したが

「此頃は三十代のご婦人方が真剣に老後の問題を考えていらっしやるので、女性が老後を迎えるとき、というようなテーマの講座を持たなくてはなりません。」と云われたが、全くこの通りで私達の周囲には平均年令をはるかに越えた高令の人々がどんどんと増えている。長寿はなんといってもおめでたいもの、しかしながら、めでたいだけでは問題は片づかない。平均寿命と共に老年期もぐんぐん伸びるのである。必ず老年になる。と云う事を自覚した時に若い世代に取っても老後を如何に過すか、という事は実に重要な問題なのである。そこで、東大阪市の或るご婦人が私は

森 正義

(善光寺住職)

身寄りの無い独身者ですので健康な間に在宅の要看護老人のお世話をさせていたゞき、その功績の点数を貯めて置いて自分が寝たつきり老人になった時、同じ願いを持ったボランティアのご婦人の方にお世話をして貰えたらどんなに助かるでしょう。と新聞に投書をして居られたが、これは発想としては確かに良い思いつきであるがボランティア活動としてはどうかと思う。(私達は、いやでも歳を取り死んでゆかねばならないのだ。)

と考えた時、長わずらいをして寝たつきりになった時、誰が世話をしてくれるか。と考えると前途に大きな不安を覚えるのである。

私は小学校六年生の時、国語読本で習った「釈迦」の伝

記を想い出すのである。

それはインドのカピラバストの王子として生れたシッダルタと老いのお出合いの章であつた。それは有名な「釈迦の四門出遊」の中の物語りであるが

シカ族の王子として幸せな日々を送っていたシッダルタは、或日馬車に乗って宮殿を出た時に一人の老人を見て驚いた。齒が抜け落ち皺だらけで頭は禿げ腰は曲り、全身がふるふるとふるえている人間であつた。シッダルタは

「あれは何者であるか。」

と御者に尋ねた。御者は

「あれは老人というものでして、人は誰でも年をとれば、あのような姿になるのであります。」

と、説明するとシッダルタは激しいショックを受けて驚いて叫んだ。

「私は、青年のおごりに酔っていて老人の悲しみに気がつかなかつた。わたしには未来の老いが約束されていたのだ。」

人々は老いや死に対して目をつむろうとするのに人間の苦しみを救うために生れてきたシッダルタは、この老人の

中にたちまち自分の運命を見たのである。

若い時に

「自分は未来の老いの住家だ。やがてあなつて死んでゆくのだ。」

と深く自覚したならば、生きる姿勢も自らきびしく、正しくなつてゆくであらう。私も小学生ながら病氣と死については釈尊の万分の一ぐらいの恐れを抱いたが老についてはそこまでは考えていなかったのである。しかるに只今、自分が老境に入つてみると老いの苦しみと不安をつくづくと感じ一刻一刻死の門に近づいている事を自覚し

「これではならぬ。どうかしなくてはならない。」

というあせりをつくづくと感じるものである。

こゝらあたりから死後のための永遠の生命といった抽象的な諦念に先がけてポックリさんへの現世的な信仰が盛になつてくるのだ。

老人達の共通な願ひは寝たつきり老人にはなりたくない。死ぬ時には楽に引き取ってもらいたい。と云う事である。

しかしながら現在の核家族では、寝たつきりになった時には必ずといってよい程、安直にホームや病院に入れて

しまおうとする。

老人に取っては、どんなに設備の行とゞいた立派な施設よりも息子夫妻や孫達に取り囲まれた家庭での生活を切望しているのである。

この場合の看護者は必ずといってよい程、息子の嫁に廻ってくるのである。地域の寝たつきり老人と接している保健婦さんやヘルパーさんなどから

「近ごろの若いお嫁さんや娘さん達は寝たつきりの親を辛抱して看病しようという気持は全くなくなってきました。手をかけてリハビリをすれば室内トイレを自分で使える程度まで治せるケースもあるんです。それには腰をすえてかゝらなければなりません。今は直ぐに特養ホームに申し込んで肩の荷をおろしたがる人が多いですね。」

といった訴えを聞くと、そぞろにうすら寒い感じがしてくるではないか。

老人を寝たつきりにしないで人間らしく生きられるように出来ないものだろうか。その為にも保健婦や看護婦が時々訪ねてあげて親切に看護の方法を教えたり看護者を力づけるといった制度がぜひつくられる必要がある。

私の住んでいる市の社会福祉事務所に所属するホームヘルパーさんは常に私の寺を訪れて仏の教えを熱心に聞かれ大慈悲の布施行を実践して下さっている姿には頭の垂がる思いがしていつも手を合わせて

「本当にいつもご苦勞様です。おとしよりは、いつも、あなたの来て下さるのを待っていて下さっていますよ。有難う。」

とお礼を申し上げているのである。

ポックリ寺信仰は今尚年よりの間でひそやかなブームを呼んでいる。一口で云うと（長わずらいをしないでポックリと極楽往生させて下さい。）という願いをこめたお寺参りである。奈良県香芝町阿日寺は恵心僧都源信（往生要集の著者）の生誕の地に建てられた恵心さんの寺で有名である。山門に着いた人は先ず自分の受付番号を確認して次に用紙に住所と名前と数え歳を書く。持参した肌着をその用紙に包んで本堂へ、本堂にも受付があり「肌着」に祈禱料をそえて係員に渡す。「肌着」は仏前に供えられ、順番に一つ一つ祈願されてゆく。祈願された「肌着」は、もう以前の肌着ではない。身につけていると、やが

てはいつかポッキリと安楽往生が出来るというのである。

この肌着は浄衣といって孝心深い恵信僧都が母君の臨終が近づいてくると「浄衣」といって新しい清らかな衣服と着換えさせてあげて除魔の法といって、あらゆる魔性が近づかないように、と祈願された事によるそうである。

そのお蔭で恵信僧都の母君は何の苦しみもなく安らかにお浄土へと往生された故事がポッキリ往生と肌着の由来である。母君の忌中に、やさしかった母君のお顔を思い起されて恵信僧都が鑿を取って一ほり彫るごとにお念仏三昧阿弥陀如来のお姿をおきざみになったのが、阿日寺のご本尊であると伝えられている。この肌着を受取る時のお年より達のはずんだ声。喜悅の情のほとばしるその顔、顔、の中に阿弥陀如来の大慈悲の救いのみ光りを感じ取らせていた。

同じく奈良県の法隆寺の近くの斑鳩の里に吉田寺というポッキリ寺がある。阿日寺より後にポッキリ寺を名乗った寺であるが開基は相当に古い。現在では阿日寺を凌ぐ盛況で毎日団体参拝のご老人達が列をなしている。数年前境内をボーリングしたら冷泉が湧いたそうで現在では信徒会館

を建て、こゝで昼食をしたりお風呂に入ったりして結構老人達のいいの場ともなっているそうだ。

この寺の本尊は恵信僧都御作と伝えられている阿弥陀如来の座像で美しく照明されたその御顔は実に崇高く有難く大慈悲の御眼をもって衆生を安養のお浄土へと迎えとって下さるようである。この寺も阿日寺と同じように肌着をご祈禱して下さるが、それが済んだ後、参詣の人々に対して住職がユーモアを交えた法話を上手にされるが、これは大変結構な法供養であると私は思った。

有難いご本尊の阿弥陀如来の御前で木魚をたいてお念仏を申し、住職の結構な法話を聴いて安心の境地に達し肌着を抱いて満足して家途につく老人の顔に一種のやすらぎを感じたのである。

この外、山形県米沢市の郊外にある「通称ころり薬師さま。」大阪市の四天王寺の境内にある万灯院（通称紙衣さん）京都府長岡京市の楊谷寺（柳谷の観音さん）などポッキリ信仰の寺は全国各地に数々あるがそれ等については何れ稿を改めて書いてみたいと思っている。

ぼっくり往生の祈禱。それ自体は昔も今も全く変りはな

いがそれが現今ブームになっているという事は核家族化が進んで老後に強い不安を抱く人々が急速に増えて来たからであろう。それと共に老人会主催による観光バスの旅行が増えてきて、同じ観光旅行をするのなら一ヶ所はどこかお寺参りをしたい。という老人心理と老後への不安が重なってポックリ寺へと足を向けさせるのである。

以前、寺庭婦人会主催のポックリ寺参拝という行事があったが、お寺の奥さん方がポックリ寺へ参拝して何を感じて来られたかを私は聞きたいと思った。

「お寺は年よりばかりを相手にして若い者を集めようとしたくない。」

という声をよく耳にする事があるが、子ども会、青年会、婦人会を開いている寺。保育所、幼稚園、養護施設を経営している寺も結構多い。だがしかし、お寺が老人達を寄せつけなくなったら、この老人達は一体どこへ行ったらよいのだろうか。私の寺も大阪府指定の（老人憩いの家）であったが最近市営の（松翠園）という「老人福祉センター」が出来て各地区のおとしより達をバスで送り迎えして一日ゆっくり遊んでもらえるようになったので何かの集い以外は毎

朝、私がお勤行をする時に一緒にお参りしてくれる老人だけになってしまったが私は寺として地域社会のお年よりに役に立たせていたゞく仕事は沢山あるように思えてならない。

老人は孤独である。特に一人暮らしの老人は話し手を求めている。

先日大阪の松坂屋百貨店の地階のスタンドの喫茶店で私がコーヒを呑んでいると一人の八十才を越えたと思われるおじいさんが両手に沢山の買物をぶらさげて私の隣の椅子に腰かけた。

「わしは、八十八才です。もう何にも楽しみはありません。地下鉄もバスもたゞですのでこうして百貨店廻りをしています。三日目毎に松坂屋に来ます。」

と云っておられた。

「わしは、目が悪いのであまいの。シュガーを入れてください。」

カウンターが、スプーンをつけるのを忘れたので

「あゝ、かきまわすもん。」

と、しきりに叫んでいる。私はカウンターに

「スプーン、をお願いします。」

というと、カウンターは、あわてゝ、おじいさんにスプーンを渡した。おじいさんは、

「これこれ。これがないとかきまわさん。」

と盛んに私に話かけるのであった。

豊田商事のセールスマンにだまされた老人たちが

「あの人が悪いんじゃない。会社が悪いんや。一番悪いのは殺された永野会長や」

と云っていたと聞いて、淋しい孤独の老人たちをだまして多額の虎の子をだまし取った悪徳商法に対してはげしい怒りをおぼえたものである。

私の寺へ相談に来られる老人達。私は時間の許す限りこの人達の悩みの聞き役をさせていたゞいている。家内も一役買ってカウンスリングをしているが、お婆ちゃんの相手は私よりもむしろ家内の方が喜ばれているようである。女は女同志。たゞ聞いてあげるだけで良いのだ。お寺は安心して聞いてもらえるところ。

ある老婦人がある。このお婆ちゃんは年は七十六才。五年前に五重相伝を受けられてから毎朝欠かさず私がお勤行

をする時間にお参りに来られて一生懸命お念仏を申しておられる。ご主人を十五年前に亡くされて最近世取りの息子さんに死別。目下息子さんのお嫁さんと孫夫婦と同じ屋敷内に別居しているがガレージ横の一室に暮している自分が亡くなった夫と苦勞して建てた二階建ての立派な家には息子のお嫁さんと孫夫婦が曾孫と一緒に暮している。今まで楽しみにしていたお仏壇のお守りも息子さんのお嫁さんがするようになってからは淋しくてならない。何となく心の隅にポツカリと空洞が空いたようである。しばらく鬱の状態が続いた。

「こうしてはならない。五重の時に日課のお念仏を誓約したではないか。家で申されないのなら、お寺へ行って申しましよう。」

と、自分専用の木魚を寺にあずけて毎朝お念仏に励んでおられるが、このお婆ちゃんが

「家で腹が立ってたまらない時は、お寺にお参りして阿弥陀様の前に座らせてもらってたゞナムアミダブツ、ナムアミダブツ、ナムアミダブツとお念仏を申させてもらいます。お念仏申させていたゞいていると、もう有難

うて、有難うて自然に涙が湧いてまいります。身も心も軽うしていたゞいて家に帰りますと嫁にも優しい顔で話をするようになり、私は今、しあわせ一杯でございます。」

と、毎日毎日を心楽しく感謝の日暮しをして居られる。

先日、悲田院高鷺寮の稲見寮母さんが来られて、こんな話をしてくださった。鬱病になるのを一歩手前で救われた一人の老婆のケースである。

この老婆は結婚して一年目にその夫と訳があって離婚し実家に帰って母親と一緒に暮していたが最近その母親が死亡した為一人ぼっちで暮しているうちに鬱の状態になってしまった。弟さんが二人いて交互に電話をかけたが全々々々らないので心配になって姉さんの家に行くと中から錠が掛っていて入れない。やっと、こじあけて中に入ると春だというのに毛布を頭からスッポリとかぶって暗い茶の間にジーツと座っていた。

弟さんは驚いて

「姉さん、どうしたの。」

と聞いても黙っていて返事をしない。

着物も何枚も重ね着して首をうなだれてジーツと坐ったきりである。

弟さんは

「このまゝでは大変だ。何とかしなくては。」

と市の社会福祉事務所に行ってケースワーカーに相談した。その結果一人暮らしではあぶないので老人ホームに入所させる事にした。

そこで悲田院の高鷺寮へ連れて行って寮の中を見せると

「一人で暮すのは淋しいから四人部屋に入れて下さい。」と、希望した。ケースワーカーは

「これは救える」

と思ったので細々と注意を与えて四人部屋に入れて貰う事にした。寮母さんは一日に何回となく、この老人に話しかけた。二週間程してから弟さんが面会に行くと、老人は「こゝに来てよかった」

と、嬉しそうに云った。以前とは見違えるように明るい顔になって血色もよくなり美しく若がえっていた。という話である。

老人の一人ボッチはいけない。特に鉄筋コンクリートの

団地の一部屋に一人暮らす事はいけないのである。話し対手が欲しい。

テレビは回答がない。しまいには一人言をぶつぶつとつぶやく老人も出来てしまう。

こうなると完全な老人性痴呆性にかゝってしまうのである。

福祉電話がある。これは福祉事務所の方から単独世帯で援護を受けている老人の枕もとに電話を設置してボランティアのご婦人が愛の呼びかけを行うのである。この声を聞いた老人は勇気づけられ慰められ、あるいは相談を持ちかけたりしている。豊田商事の事件の直後、福祉員が電話をかけると老人の多くは恐がって受話器を取らなかつた。という事である。私は、この福祉電話が単に、「愛の呼びかけ」の言葉だけではなく最少限であっても老人達の要求に応ぜられるよう地域の篤志ホームヘルパーの派遣をして欲しいと思うものである。東大阪市に「はだしの会」というボランティアのご婦人方の会があるが、この会の会員の一人が「私は十二年間、寝たっきりの姑さんの看護をしてまいりましたが先日亡くなりました。やれやれ、これから自分

が今までしたいと思っていた事が出来る。と開放されたような気持になりましたが、さてそうなって見ると何だか手持無沙汰で、これから姑さんへの追善供養の為に一人暮りで病気をされて寝たっきりになられた、ご老人のお世話をさせていたゞきましよう。」

と奉仕ヘルパーとして働いて下さっているのである。この方の手記を読ませていたゞくと、これこそ佛の教えに順ずる真の菩薩行であると感激した事である。

この方が老人になられた時は、地域社会の人々が決して見捨てはしないであろうと思う。

老年期と老衰期に分けることを吉田寿三郎先生は提案しておられるが。

身体が元気で精神力の旺盛な、老盛期には若い人達に交って大いに働くことである。

そのかわり、いずれは訪れてくるであろう老衰期になったらホームヘルプなどのサービスで守ってもらえる。そして、生きがい、を最後まで持つことである。同居していても別居にしても、老人ホームに入っているも「随所に主となる」の気持を持っていればどこにあっても大丈夫であ

る。老衰期に入って、たとえ寝た切りになっても、生き甲斐は心がけ次第で持つ事が出来るものである。

私の友人のおかあさんと、念仏ばあさん、と呼ばれていた方があった。京阪病院という精神病院に入院された。と聞いたもので私は去る九月十日にお見舞に行ってきた。

もう八十六才で髪の毛は真白、常日頃おとなえておられるお念仏のお蔭で、やさしいお顔をしておられた。私が部屋に入ってゆくと手を握って喜んで下さった。どんな境遇にあっても、それを阿弥陀如来の大慈悲のみやづかえと正しく受けとめてゆかれ只なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、とお念仏の裡に明るい日暮しをして居られるのであった。

婦長さんも

「おとなしいお方です。なんでも喜んで下さるのでお世話の仕甲斐があります」と云って下さったので、やれやれと胸をなでおろした事であった。この方も老盛期にはずい分活躍されたのであるが、年令と病いには勝てず療養生活をしておられる事は、まことに痛ましくお気の毒な次第である。

お年寄り。特に一人暮らしの体の弱っている方々に全国各地の寺庭婦人会やその寺の檀信徒による婦人会の奉仕活動として、寺で催される行事等に参加していたべくお手伝いをしてもらえたらどんなにか喜ばれる事だろうか。私の師匠の故長谷川順孝先生は自坊で修行された五重相伝に吹田市の弘済会の老人たちを受者として参加させられ、それから後も引続いて老人ホームに法話のご奉仕をしていて下さった。尊い法供養であった。

体が弱く、家にとじこもりがちなお年寄りを地区の老人福祉センターに招いて、ボランティアの人たちが一日中お世話をする全国初の「虚弱老人デー」サービス制度が去る十月二十四日から大阪市内でスタートした。

元気なお年寄りと一緒に俳句や囲碁のサークル活動を楽しむ「社会参加」で生き甲斐を見出してもらおう。あわせて一時的にせよ介護疲れから家族を開放することを目ざしている。老人福祉センターは市内二十六区に一ヶ所づつ、あり大阪市はまず二ヶ所で実施し順次に広げてゆく考えである。データービスの対象は、脳卒中の後遺症で手足が不自由だったり病氣治療中で家族の手助けなしには生活出来ない人。

老人福祉センターの利用資格と同じ六十才以上となっている。当面天王寺区、鶴見区、住之江区の各区の老人福祉センターで週二日間、一日に八人ずつ受入れられる。大阪市ホームヘルプ協会の婦人ボランティアが、つきっきりでお世話をし、本人の希望に応じ俳句、民謡、囲碁などのサークル活動に加わってもらう。一人が週一回利用できて無料である。大阪市民生局では

「気分転換が何よりの健康法であります。お年寄りの世話で外出もまゝならない家庭の方々にも喜んでもらえます。」と話しておられたが、大阪市ホームヘルプ協会の婦人ボランティアの方々による奉仕活動だけではなしに、先に述べたように全国各地の寺院の地域活動として先ず檀信徒の家庭で淋しく暮して居られる要介護老人に対してこうした布施の行が出来ないものだろうかと痛感する次第である。

評論家の島田とみ子女史がアメリカ人の老後を見てもられてこういうお話を書いておられるので引用させていたゞく。

二年ばかり前にアメリカ人の老後を見て歩いたことがある。二千五百万人という日本の三倍以上の老人をかくえる

国だけに、福祉対策に大きなお金が使われていた。しかしアメリカの老人たちは男も女もしあわせにはみえなかった。老人センターにいくと、ひる時には近隣の老人たちがぞろぞろと昼食をとりに来たのに出会った。私もその無料の給食のごちそうにあずかったが、上手に調理されており大へんおいしかった。しかし貧しい老人たちは隣に坐った仲間と話もせずに食べ終ると、波がひくように帰っていった。みな一人暮らしであり、その表情は明るいものではなかった。

私は老人たちを見送りながら棄老という言葉を思い起していた。はつきりいえば、アメリカ社会では老人たちは余計な存在のように扱われている。若さに価値をみとめるお国柄であり老いた人間は無用のものとして無視されがちである。そういう社会のあり方処遇を抗議する本もでているし、老人団体の活躍もさかんである。しかしその風潮は簡単にはなくならないようである。たとえば老人ホームにしても支払えるお金の金額によって安いところ、中くらいのところ、高いところといういろいろある。営利を目的とする有料ホームが多数存在する。また、老人は最後まで独立して

生きることが尊敬されるからやたらに人に頼ることはしない。

OA叢書、女が老後を迎えるときより、核家庭化が進み、女性がほとんど各職場で働くようになると、寝たきり老人や痴呆症の老人を家庭内でお世話をしてゆく事は到底不可能な事である。最後は短期、長期の施設へ収容させなければならぬ事になる。日本はアメリカのような棄老の国にしてはならない。老人保健法は、老人病院から家庭へと老人を退院させて、医療費を節約させることを目ざしているという。しかしこれは何が、こうした処置が老人に対して一番適切であるかという事を考慮しなくてはならない。その為には家庭介護の能力や経済状態などをよく知っている寺院住職が、民生委員を兼ねておられたら一層結構であるが、この家庭の一つ一つのケースに対して単なるお役所仕事ではなく血の通った仏作仏行を講じてゆきたいものである。

最後に老人達が一番望んでいるものは、
「生き甲斐」と「不安の解消」である。

生き甲斐については、先に述べたように社会参加への道

を開いてあげること。先日もある高校生が地域の老人会の人たちと秋の一日、運動会をされたは、笑ましいニュースを聞いたが、こうした行事が全国的な運動として展開される事が望ましい。

「不安の解消」であるが、これは宗教による以外に方法はないと思う。年を取って病気をすると次第に前途に不安を感じて来て心細くなるものである。こゝに於て平素の信心によって思い直しが出来てくる。

ホームヘルパーさんが、私の拙い「テレホン法話」をダイヤルを廻して聞かせてあげると、何度も何度も聞かせてくれ、と云って心のよりどころとしていると話してくれた事がある。淀川キリスト教病院では癌の末期の病人に対して医学と宗教とで安心して死んでゆけるよう導いているそうであるが浄土教を信奉する僧侶は釈尊、法然上人のみ教えを体し信念を持って老人福祉の寺院としての役割と使命を考え実践してゆかねばならない。